

審査の結果の要旨

氏名 石川ひろの

本研究は、保健医療サービスの頻繁な利用者である高齢患者を対象とし、診療場面でしばしば見られる家族などの付添の同席が、診察におけるコミュニケーションおよび患者による診察の患者中心性の評価に与える影響を検討すること、また、患者中心的な診療が患者アウトカムに与える影響を検討することを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 三者間診療では、診察全体に占める医師の発話割合は二者間診療の54.1%に対して48.7%、患者の発話割合も45.9%に対して29.1%と低くなっていた。三者間診療において、付添の発話は平均で診察全体の22.2%を占めており、最大で54%を占める診療がある一方、付添が同席しながら全く発話をしなかった診療も3診療あった。付添の発話の種類を患者のものと比較してみると、医学的情報提供の割合が少なく、逆に質問の割合が多いという違いが見られた。付添に特有のコミュニケーションとして、患者・医師への通訳、患者の発話の促し・支持、患者の同意の確認など、患者のコミュニケーションをサポートする発話が付添の発話中8.4%を占めていた一方、患者への非同意・批判・説得、自分自身の健康問題の相談なども見られることが明らかになった。
2. 患者による診察の患者中心性の評価は、付添の有無そのものによっては異ならなかった。一方、三者間診療の群について、付添および患者の診療でのコミュニケーションへの参加度との関連を見ると、付添の発話割合は、患者による診察の患者中心性の評価と負の関連が示され、診察時間が短い場合には特にその関連が強いという診察時間との有意な交互作用が見られた。逆に、患者の発話割合が多いほど、患者は診察を患者中心的と評価しており、その関連は診察時間が短い場合に特に強かった。
3. 付添の有無に関わらず、診察が患者中心であったと評価していた患者ほど、服薬アドヒアランスが高く、4週後の身体的健康および精神的健康の改善がよいという関連が示された。また、服薬アドヒアランスは、付添とともに受診した患者で有意に高かった。

以上、本論文は、これまで医療場面におけるコミュニケーションの研究でほとんど検討されてこなかった、付添を含む三者間のコミュニケーションについて詳細に分析し、患者中心の診療の重要性を実証的に明らかにした。本研究は、日本の医療場面における医師-患者-家族関係のあり方に重要な示唆を与えると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。